

巻 頭 言

文教大学が大きく変わろうとしている。それが良いことか、悪いことかは別として、混沌の中で一步を踏み出そうとしていることだけは、誰しもが認めることであろう。その動因の一つに、「大学の冬の時代の到来」という一般論と、それに対する「怯え」と言うべきマイナスの方向がある。わたくし自身は、こういう議論に組しようとは思わない。怯えに追い立てられて駆け出そうとすれば、鹿でさえ崖から落ちることがある。まして、判断力の乏しい人間が足下だけしか見ないで駆けていけば、その先に何があるか知れたものではないからである。

兼好法師は「改めて益なき事は、改めぬをよしとするなり」（『徒然草』127段）と言っている。金言であろう。深く考えぬ改革は、徒に混乱を招くだけなのである。やや官僚的・機械的になってきている大学の体質の中で、何が必要なのかを互いに考えてみるべきときなのである。

さて、混沌の中で、言語文化研究所はいかにあるべきかが課題である。現在の留学生別科を中心とする教育機関としての出発、別科が独立して研究・研修機関としての自立へと歩んできた歴史は、まず振り返っておかなくてはならないだろう。即ち、抽象的に言語・文化とはという命題を唱えていたのではなく、実践的に国際交流を支え、教育・研究と結びついて存立してきたのである。人と人とを結び付け、それを大学共有の財産としようとするサービス機関、それが言語文化研究所の主要な一面なのである。それをより有効に働かせようとするにはどうしたらよいか、工夫が必要である。

また、研究所としての、自立した共同研究もあるべきだろう。今まで蓄積された多くの研究実績を踏まえて、より衆知を集めた研究が成り立つ筈なのである。これからの課題である。

1997年2月

言語文化研究所
所長 田口和夫